
本日も晴天なり。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本日も晴天なり。

【Nコード】

N4161B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

元彼に生きる権利を否定され、不登校になった女の子を救ったのはたった1人のフリースクールに通う男の子だった。「美都が生きてて良かった」……………晴天の下で起こった、感動のラブ・ストーリー。

——お前なんかいなきゃ良かった。

お前なんか生まれてこなきゃ良かったんだ——

自分を否定され、はじめて自分は必要ないんだと知った。
自分がいなくてもこの世は成り立ち、時は過ぎてゆく。

「美都、カウンセリングに行ってみよう？」

「ママ、ほっといてって言ったでしょ」

冷たくつけないです。

あたしは読んでいた本にまた集中する。

ママは心配そうにあたしを身ながら、再び家事をし始める。

あたしはいわゆる不登校児。

学校へ行けなくなってしまった。

別にイジメがあつたわけじゃなくて、友人関係も成績も良好だった。

高校に入ってはじめて彼氏もできて、とても喜んだ。

全てが順調だった。

はじめての彼氏は、積極的な人であたしはいつも彼について行っていた。

強引というわけではなく、明るく元気な感じの人。

そんな彼にあたしは絶対的な信頼を寄せていた。

「直人、その人だれ・・・？」

「美都・・・」

けれど、結局夢は儚く散ってゆく。

彼の浮気相手の女の人は、彼にあたしという彼女がいるってことを知らされてなかったらしい。

そのことで大喧嘩になってしまった。

『結局直人はどっちを取るのよ』

『んなの恵美に決まってるだろ』

『なお・・・と？なに言ってるの？だってずっと一緒だよって・・・』

はじめてのデート、直人はあたしにずっと一緒にいようって言って指輪をくれた。

あたしにはその瞬間瞬間が今でも鮮明に思い出されていて、当時うれし泣きしたのを覚えてる。

ずっと一緒だよって

なにがあっても2人で乗り越えようって
指輪に誓った。

『あーもう！わかれよ！俺はとくにお前なんかじゃなくて恵美のことが好きだったんだよ。言わせんなよなあ、ったく。ややこしくすんなよ』

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

いつからあたし、直人に愛されてなかったんだろう。

なんでこんなにも歯車が狂いはじめてしまったのだろう。

『お前なんかいなきや良かった。お前なんか生まれてこなきゃ良かったんだ』

女の人の甲高い笑い声と直人の鼻で笑う声だけがその場に響いていた。

そして2人は手をつなぎながら去ってゆく。

まるで機械のように、ただただ立ち尽くす。

ポツリポツリと道路に滴り落ちる涙を拭こうともせず、ただ2人の行った方向を見つめた。

雨が降っていたら涙を隠せたのに。

その翌日からあたしは学校へ行かなくなった。

部屋に閉じこもっているあたしをママとパパは心配した。

特に専業主婦のママは、しょっちゅうあたしに話しかけては悲しそうな顔をする。

絶対的な信頼を寄せていた人に裏切られ、自分は知らない人間なんだと諭され、あたしはもうどうしたら良いの。

だれを信じて、なにを思っ生きていけば良いの。

あたしはこれ以上なにをしたら良いの。

どうしてあたしじゃだめだったんだろう。

どうして最後まで愛を貫けなかったのだろう。

「たまには一緒に買い物に行かない？美都。きっと良い気分転換になるわよ」

「良い」

「そんなこと言わずに、ほら」

ママに無理やりつれられて、外に出る。

たぶん3日ぶりくらいだと思う。

だから余計に太陽の光がまぶしく感じられた。

家の中の電気の明るさなんか比べものにならないほどの日光。

思わず目をつすめた。

「良い天気ねー、今日は洗濯物がよく乾くわ」

「・・・ママ、どこ行くの？」

「そうね。ついてくれば分かるわ」

とりあえずママのあとについていった。

なじみの街を通り抜け、裏道に出る。

その先を永遠と歩き続ける。

だいぶ歩いたんじゃないかって思った頃、ママはいきなり立ち止まった。

「ここよ」

「フリー・・・スクール？」

こんなところにフリースクールがあったなんてはじめて知った。
建物の立派さに思わず見とれた。

「ママはあたしにここに通えって言っの？」

「そうじゃないわ。ただ美都にこの学校に通う子たちの姿を見てほしいのよ」

「え？」

「中入ってみましょう」

校門を開け、中に入る。

待ち迎えたかのように1人の男性が立っていた。

「ようこそ、お待ちしております。白井様ですね」

「ええ。見学に来ました」

「どうぞ」

たくさんの教室がある。

けれど、そんなに人の姿は見当たらない。

と、思ったとき1人の男の子を見つけた。

なにやらメイク道具らしきものをたくさん持っているようだ。

少しの間その男の子を見てみると、あたしに気づいてこっちに向かってきた。

「新入り？俺、忍足夾！よろしく！」

「えっ・・・あ、はい。高原美都です」

人なつっこい男の子。

元気があつて・・・そう、まるで直人のよう。

そう思うと背中がゾクツとした。

「美都ちゃんは何にになりたいの？」

「え？」

「俺は理容師になりたいんだ！だから普通の学校は辞めてここに通いつつ理容について勉強してんだ」

「あたしは・・・」

場違いのようではなかった。

別に夢もない、やりたいこともない、だけど学校へは行かない。

そんなこと口が裂けても言えなかった。

するとママが口を挟んだ。

「この子今学校へ行つてないの。だからここへ連れてきてみたのよ」

「へえ、そうなんすか。美都ちゃん学校嫌い？」

「学校が嫌いなんじゃない・・・」

はじめてあたしが学校へ行かない理由にたいして少しでも話そうとしたことにママは驚いていた。

あたしママにもパパにも言えないでいた。だって、言えない。

そんな理由で行かないのかって言われたら、あたしきつともう立ち直れない。

あたしにはそれが全てだった。

それだけがあたしの生活だった。

だからそれを取ったらなんもないの・・・

「・・・ねえ美都。ここへ通ってみない？」

ママがあたしの肩に手を置く。

あたしはママの顔を見上げた。

「きつと美都にとって良い環境なのかもしれない。ね？」

「そうだよ！入ったら良いよ。きつと気に入るよっ」

2人に押され、あたしは頷いてしまった。

けれど、後悔はしなかった。

なにもしないでいるより、なにかしての方が良いって思った。

学校へ行けない日々が続くけど、でも学校へ行けないならなにか他のものを探したら良いんじゃないかって思った。

翌日、手続きをした。

あたしはすぐにこの学校に入学することができた。

この学校にはほんとにたくさんの人がいた。

夾くんみたいに理容師になりたい人や、音楽系に進みたい人、プロ将棋士になりたい人、その他いろいろ。

学校に来ないこともけつこうあるみたいだけど、みんな口を揃えて言った。

この学校があつて本当に良かった、と。

あたしは特にすることもなかったから、勉強道具を持って毎日フリースクールに通った。

もともとそんなに勉強は苦手じゃなかったから、学校へ行つてなかったときの分の学力もなんとか取り戻せた。

勉強をしたり、お話をしたり笑ったりで、フリースクールはあたしにとってとても居心地の良い場所。

「おつ、美都ちゃん。久しぶりー」

「夾くん！4日間ぶりくらいだね。お帰り」

夾くんは理容師専門学校短期講座を受けに行っていた。夢に向かって頑張る姿って格好良いな。

あたしにもなにか追いかけるもの見つかったら良いのに。

夾くんは本当に優しくて明るくて良い人。

あの日から家族以外の人と触れ合うことを避けてたあたしに、積極的に話しかけてきてくれた。

そのおかげですごく仲が良くなれた。

ママやパパとも楽しく会話ができるようになって、2人はうれしそうに喜んでくれた。

だからあたしはママ、パパそして夾くんにも全て話した。

直人のこと、振られたこと、いなければ良かったと言われたこと。

そしてあたしは学校へ行けなくなったのだと。

『よく頑張ったね、美都』

ママとパパの目には涙があった。
そしてあたしの頭を優しくなでてくれた。
あたしもつられて少しだけ泣いてしまった。

『夾くんがね、受け止めてくれたの』

ママよりもパパよりも、一番先に話したのは夾くん。
あたしが夾くんとともに話せるようになってから話した。
あんなちっぽけなことに笑いもせずに、あたしが話し終えるまで真剣な顔をして聞いてくれていた。
あたしはなぜか安心して話せた。
そして夾くんは言った。

『美都ちゃん、お疲れ様。大変だったろ？もうなにも辛いことな
んかはないよ』

『夾くん・・・』

『たった1人のそんな男のために人と関わらないようにするなんて
もったいないよ。俺はもつと美都ちゃんのこと知りたいって思うよ』

あんなにひどく落ち込んでいたあたしの心は、いつのまにはすつきりしていた。

もうなにも悔やむことなんかはないという気持ちになれた。

『美都ちゃんがいてくれて、俺は本当にうれしいよ』

そのときの夾くんの微笑みが忘れられない。
あたしのことを必要だと言ってくれた夾くんが、自分はいらない子だと思いこんであたしを受け止めてくれた夾くんが、愛しかった。

ありがとう、ありがとうって何度お礼を言っただろうか。

永遠であると思いながら裏切られた悲しさは、夾くんへの愛しさへと変わってゆく。

もうなにも恐れるものなどない。

だって、あなたが側にいてくれるから。

「あつそだ！これから理容学校で知り合った奴と講座終了を祝ってパーッとやろうって話してたんだ」

「へえ、楽しそうだね」

「だろ？向こうは彼女連れてくるって言うから俺も美都ちゃん誘おうと思うて。どう？行かない？」

「行く行く！」

「決まりっ」

また人を信用して傷つくのは嫌だけど、夾くんはそんな人じゃないって知ってる。

だからこうして再び笑ってるあたしがいる。

けど、このあとなんであたしは夾くんについていってしまったんだろうと後悔することになる。

割と近くのファミレスらしい。

歩いて15分で行った。

どんな人と友達なんだろうってわくわくした。きっと夾くんの友達だから良い人に違いない。

そう思っただけに入ると、夾くんを呼ぶ声が聞こえた。

「おい夾！こっちこっち」

聞き覚えのある声だった。

あたしはその声の持ち主の方へ振り返るとともに、夾くんが言った。

「いたいた直人！わり、遅くなって」

直人・・・

どうして直人がここにいるの？

「友達つて・・・」

「あ、紹介するよ。 楠木直人！近くの学校に通ってたぜ」

夾くんの言葉に反応できない。
震えて、声すらでない。

直人と彼女があたしに気づいて近づいてきた。
あたしは糸がピンと張り詰めたような緊張感に襲われる。

「よお美都。久しぶりじゃん」

「やだーこの子って前の直人の彼女じゃない」

「ど・・・して・・・」

「俺も理容師目指してんだよ。言っただろ、昔」

そういえば付き合いだした頃そんなことを言っていた。
頑張ってたねって・・・言った。

どうして気づかなかったんだろう。

どうしてもっと警戒しなかったんだろう。

あつてからではもう遅いのに。

「へえ。学校来なくなっと思ったたらフリースクール通ってたんだ」

ニヤニヤしながら直人が言う。

またよみがえる、悪夢。

才前ナンカイナキヤ良カツタ。才前ナンカ生マレテコナキヤ良カツタ。

「美都ちゃん？直人の元彼女なの？」

「う．．．ん．．．」

「まさかお前らが知り合いとはな！。夾、知ってつか？そいつ俺と別れたあと不登校になったんだよ。まじびびったぜ。そこまで俺にぞつこんだったとはなあ」

声に出して笑う。

彼女も横でクスクス笑っている。

もうやだ．．．

やっぱりあたしなんていなきや良かったんだ。

そうしたらまたこんな惨めな思いすることなんかなかったのに。

足がすくんでその場から逃げられない自分も、なにも言い返せない自分も、弱くて臆病で大嫌い。

「そうか、お前か．．．」

夾くんがポツリと呟いた。

それと同時に、おもいきり直人の頬を殴った。

「いつ．．．．．?!」

不意打ちをくらった直人はモロに受けて、その場にドサツと倒れこんだ。

彼女がすぐに駆け寄った。

あたしは呆然として、殴られた直人を見た。

「夾・・・くん？」

あの夾くんが直人を殴った？

あの、夾くんが・・・？

「美都ちゃんから話を聞いたとき、美都ちゃんをそこまで追い詰めた奴に会ったら絶対一発殴ってやろうって決めてた」

はじめて見る夾くんの怒った顔。

驚いてばかりの光景にもう口も開けない。

「お前・・・お前なんか美都ちゃんの生きる権利を邪魔する権利があんのかよ！学校行けなくなるまで傷つける資格あんのかよ！」

「し・・・知るかよ！そいつが勝手に傷ついて不登校になっただけだろ！」

「責任逃れもたいがいにしるよ！信頼してた奴にあんなこと言われて正常でいられる奴なんかいねえんだよ！！」

夾くんが倒れこんでいる直人の胸倉を掴む。

「美都ちゃんはないっ、あんなこと言われたって決してお前のことを悪くは言わなかったんだぞ！直人は悪くないって、それだけだったんだ！」

夾くんの怒鳴り声に直人がひるんでいるのが分かる。

あたしは必死の思いで、後ろから夾くんに抱きついた。

「もう良いよっ・・・もう良いから、夾くん！」

すると、嘘のように夾くんはピタリと止まった。
直人の胸倉を離した。

「かばってくれてありがと、夾くん……あたしほんとにそれだけで十分だよ」

「美都……」

「あたしも……頑張らなくちゃだね」

人はみんな大変な思いをして高い壁を乗り越える。

それは決して楽な道のりではないけれど、でも越えられたときの自分に意味がある。

あたしもそろそろ立ち上がらなきゃいけない。
ずっと逃げてるだけではだめなんだ。

もう後ろを振り向かないし、前へ進みださなきゃならない。

坂道やでこぼこ道もあるだろうけれど、それは越えられないものではない。

「直人」

凜とした顔って、たぶん今のあたしのような顔のことを言うんだと思う。

だって今あたし、直人を前にしてそれほど心が穏やかなの。

「あたし生きてなければ良かったなんて思わない。むしろ生きてて良かったって思うよ。夾くんという人に出会えたこと、ほんとにうれしいから」

高い高い壁はどうあがいてもよじのぼれない。

壁のてっぺんに手すら届かない。

どうやってのぼったら良いのか迷っている。

けれど、今あたしの前に男の子が現れた。

男の子はあたしを肩車してくれた。

あたしはその壁のてっぺんに手をかけることができた。
そしてあたしは言うんだ。

—— ありがとう、夾くん ——

夾くんがあたしの右手を握る。

心のあたしに現れた夾くん、現実にも現れた。

心のあたしができたならきつと現実のあたしにもできるはず。

「直人に出会えたことも、うれしいよ。直人にああ言われたことで
あたしは2倍も3倍も強くなれた。ありがとう」

言い終わって、夾くんの顔を見ると、前に見せたあの愛しい笑顔を
同じ顔。

あたしは思わず少しだけ顔が赤くなってしまった。

「夾くん、あたしはもう大丈夫」

「うん」

「やりたいこと見つける」

「うん」

「あたしらしく焦らず行く」

夾くんは頷いた。

あたしはきつと大丈夫。

もう泣いてばかりのあたしじゃない。

「一緒にいてください」

あたしが生きてることを喜んでくれたあなたがいてくれることが本

当にうれしいの。

人生のどん底にいたあたしを救ってくれたのは、あなただった。人の愛はこんなにも暖かいものなんだと、実感した。

「あたりまえだろっ」

直人と彼女を残してファミレスを出ると、青々とした晴天な空だった。

ちょうど直人に振られたときと同じように。

けれど、今度はこの空の下でいなくなりたいなんて思わない。雨だったら良いのになんて、思わないよ。だってこの空の下であたしは笑ってるから。もう雨が良い理由なんてない。

「美都が生きててくれて良かった」

「でしょ？」

「美都のお母さんに感謝だなっ」

夾くんがあたしを美都と呼ぶ新鮮さに、つい顔がニヤける。

ママにも感謝だけど、でもやっぱりそこにいたのが夾くんだからなんだよ。

夾くんがいなきゃなにも始まらなかった。

——生きててくれて良かった——

あなたのその言葉を旨に、あたしは明日を生きてゆく。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4161b/>

本日も晴天なり。

2010年12月26日02時54分発行